

33カ国リレー通信



ボリビア多民族国

Estado Plurinacional de Bolivia

“私たちは狂っている (Somos locos)”

椿 秀洋

筆者は2015年12月22日に、3年余の駐ボリビア大使としての勤務を終えて帰国した。豊富な鉱物資源を有しながら貧困に喘ぎ、かつて「黄金の椅子に座った乞食」と評されていたボリビアは、10年に及ぶモラレス政権下で「良く生きる」(Vivir Bien)を掲げて改革に取り組んでいるが、依然として「改革プロセス」の途上にある。過去10年間、国際的な資源価格の高騰にも助けられて順調に伸びてきた経済も、15年夏以降の石油をはじめとする資源価格の急激な下落が影を落とし始めている。モラレス政権の頭脳と言われるガルシア・リネラ副大統領は筆者に対し、15年秋のベネズエラとアルゼンチンの選挙での左派政権の相次ぐ敗北や、ブラジル・ルセフ大統領の支持率低迷について、経済状況の悪化がラテンアメリカにおける左派政権の退潮を招いていると述べていた。経済状況の悪化や貧困の増大等が左派政権の台頭を招くのではないかと思うが、副大統領は逆の見方をしていた。

16年2月24日、モラレス大統領は、同大統領の3選に道を開くために新政権発足1年1ヶ月後の同21日に実施した憲法改正の是非を問う国民投票において、改正案が否決されたことを認めた。残

る任期は3年11ヶ月。モラレス大統領はこのまま引き下がるのか、「改革プロセス」は頓挫するのか、2019年の大統領選挙へ向けてボリビアの政治情勢はどう動いていくのか注目したい。



モラレス大統領と談笑する筆者 (2015年2月)

ボリビアは赴任前の予想とは大いに異なり、自然、風土、文化等が実に多様で魅力的な国だった。何よりも、素朴ながら知性豊かで機知に富み人情味溢れた人々との胸襟を開いた交流が忘れられない。ボリビアについて語る切り口は数多くあるが、本稿では特に印象に残った国民性や県民性を紹介したい。



ボリビア地図

Todo es posible, pero nada es segura. (Bolivia)

2013年4月、日本の草の根無償で完成したカトリック大学カルメンパンパ分校女子寮の引渡し式に出席した時のことである。分校はラパスから標高4,670mの峠を越え、車で3時間ほど下った標高1,730mの保養地コロイコから、さらに1時間ほど狭い山道を抜けていくと忽然と姿を現す山腹のキャンパスである。全寮制で男女学生が農牧業を学んでいる。

分校に到着した時、学生達が一生涯懸命日本語で「こんにちは。ようこそカルメンパンパへ」と挨拶する練習をしていた。教えていたのは国際協力機構(JICA)研修生として帯広畜産大学で学んだ経験のある女性教員。「こういう山深いところにまで、日本で学んだことのある人がいる!」というのが新鮮な驚きであり喜びであった。

12年10月のボリビア着任以来、「ボリビアでは『なんでもあり』(Todo es posible)」と繰り返し聞かされていたので、キャンパスを案内されながら何気なくそれを口にしたところ、若い男性教員が「でも確かなものは何もないのですよ(Nada es segura)」と付け加えて微笑んでいた。それ以来、「ボリビアではあらゆる事が可能。しか

し確実なものはない」と自らに言い聞かせるようになった。スピーチでもしばしば使用したが、その度に聴衆が手を叩いて喜んでいたので真実なのだろう。



カルメンパンパ分校キャンパス (2013年4月)

Siga descansando en paz. (Tarija)

同じく2013年4月、県知事から「タブラダの戦196周年記念式典」に招かれてタリハを訪問した。出迎えてくれた県庁職員にタリハの県民性について尋ねたら「普通、墓碑銘には『安らかにお眠り下さい』(Descanse en paz)と書きますよね。でもタリハは違うんです。『引き続き安らかにお眠り下さい』(Siga descansando en paz)と書くのです」と答えて呵々大笑している。筆者もつられて笑ってしまった。

タリハはボリビア最南部の県でアルゼンチン、パラグアイと国境を接している。近年でこそ天然ガスを産出するようになって裕福な県になっているが、元々は酪農とワイン生産を主産業とする農牧県。人々は明るくだらかでのんびりしているという定評がある。時間にも無頓着で、上記式典も2時間45分遅れで始まった。さらに式典の翌日、12時発の便でラパスへ戻るため空港で搭乗案内を待っている時に、ハイメ・パス元大統領の子息である市議会議長から「11時半から市議会で市の賓客宣言を行うので出席して欲しい」と電話

がかかってきた。時間的に不可能だと丁重に断ったが、事前には全く連絡がなかったので段取りの悪さに呆れてしまった。その市議会議長は15年3月の選挙で市長に当選し、6月から市長を務めている。

ボリビアにはタリハ人に関するジョークが多い。スペインではガリシア州、キューバではピナル・デル・リオ県の人々をからかうジョークと共通するものがある。異なるのはタリハの人々は誇らしげに自らを笑いの対象にするところだろうか。

15年7月に市長の招きでタリハ市創立記念日式典に出席するため再びタリハを訪れた。小学校の女性教諭が、式典の中でタリハの歴史を紹介する際に「我々タリハ人には自らを笑うことができる優れた能力がある」と述べるのを聞いて、はたと膝を打った次第である。

因みに、タリハは女性が美しいという評判がある。ボリビアの中で3Wを満たしている唯一の県である。



タリハの公園で出会った女子学生達

Fiel y fina. (Potosi)

ボリビア南西部のポトシは、ポトシ銀山や世界のリチウムの半分が賦存すると言われ「天空の鏡」としても人気の高いウユニ塩湖が存在する鉱業県である。日本の亜鉛輸入の4分の1はサンクリストバル鉱山から輸出されている。人々は誠実で口数が少なく働き者であ



ると評され、特にポトシの女性は「貞節で繊細」(fiel y fina)と謳われている。「Potosina, fiel y fina」という名曲もある。

2015年11月に再びポトシを訪れた。市長主催昼食会の席上、筆者が「fiel y fina」に触れたところ、官房長が「そう言われていますけど、角を曲がったら解りませんよ (Son fieles y finas hasta la esquina)」とからかった。すかさず女性陣に「何をおっしゃいますか。私たちはお墓に入るまで貞節で繊細です! (Somos fieles y finas hasta la sepultura)」と反撃されて頭を掻き皆で爆笑した。筆者が韻を踏んだ揶揄と反駁の応酬に感心したことは言うまでもない。

Somos locos (Sucre)

驚いたのはスクレである。2013年7月に初めて訪問した時、空港からホテルへの道すがら運転手に「スクレの人々の特徴はどういうところですか」と尋ねたら、笑いながら「私達は狂っています (Somos locos)」との返事。一瞬耳を疑ったが、ボリビアで最初の精神病院がスクレに建設され、全国の狂人が収容されたからだという。

事実、1884年に時の大統領グレゴリオ・パチェコが精神を病んでいた祖母を治療するために私財を

投じてボリビアで最初の精神病院を開設し、それまで野放し状態だった全国の精神病患者にも門戸を開いている。しかし、筆者が面談した国会議員や市長、大学学長、新聞社編集長のみならず、一般市民まで口を揃えて「私達は狂っています」と答えるのは如何なものか。

パチェコ病院については「ある日、外出許可を得て全ての患者が街に出掛けたが、程なく全員が戻ってきた。あまりにも帰院が早いので理由を尋ねたところ『街は狂人で溢れていたのが怖くなって帰ってきた』との答だった」というジョークもある。スクレ出身の人に「あなたも狂っているのですか?」と尋ねると、大抵の人が笑いながら「そうです!」と胸を張る。むしろ筆者がそれを知っていることが嬉しいという反応だった。



スクレ市の生徒代表と
(両端は筆者夫妻。2013年7月)

スクレを訪問したのは、08年に日本政府が無償供与した15の小中学校の生徒と父母の代表の参列の下、日本政府に感謝する式典が市庁舎で挙行されたからである。

式典当日、朝食を摂りながら「何故スクレの人々は『私達は狂っています』と言うのだろう」と考え続けていたが、「スクレの人々が言う『狂気』は『ドンキホーテ的勇気』だ。『蛮勇』と言っても良い」と閃いた。

式典の時間になった。市庁舎前に整列した儀仗兵を閲兵した後、生徒達が日の丸の小旗を振って歓迎する中を通過して市庁舎に入った。答礼挨拶する際に「狂っているスクレ市民の皆様」と呼びかけて良いかどうか迷っていたが、なんと筆者の前に感謝の言葉を述べた市長が「狂ったスクレ市民諸君 (ciudadanos locos sucrenses)」と呼びかけているのではないかと。これに安堵して筆者も同様に呼びかけることに決めた。

筆者が挨拶する番になった。「親愛なる『狂っている』スクレ市民の皆様、おはようございます」と呼びかけた。どっと爆笑が起こり、それまで堅苦しかった雰囲気が一気に和んだ。そこで、「昨日から、お会いする方が皆さん『私達は狂っている』とおっしゃるので、ずっとその意味を考えていましたが、皆さんがおっしゃる『狂気』は『勇気』と同義語であると理解するに至りました。その『勇気』がなければ、独立宣言など行えるものではないからです」と続けた。出席者の顔がほころび大きな拍手がしばらく鳴り止まなかった。



スクレ市庁舎前で儀仗兵閲兵 (2013年7月)

ボリビアの首都機能はラパスに移っているが、憲法上の首都はスクレである。2008年には、スクレで開催されていた制憲議会に対して、現在の司法のみならず行政、立法、選挙も含めた四権の全ての

中心をスクレに設置せよと主張する学生達が警官隊と衝突して3名の学生が落命している。

市長室にはドラクロアの『民衆を導く自由の女神』の構図を模した絵が掛けられていた。三色旗を掲げる自由の女神の代わりに、スクレ市旗を掲げる女子学生が描かれていたのが印象的だった。

ボリビアの交通マナーは劣悪である。しかし、スクレだけは歩行者も自動車も信号を厳格に守っていた。人も車も平然と信号を無視する他の都市と比べると感動的でした。これも「狂っている」からだろうか。



スクレ市長の執務室に掛けられていた絵画

他にも「ボリビアには泣きながら来て、泣きながら帰る」「ボリビアは理解するのは困難だが、忘れることは不可能な国」「アイマラの文化に偶然という概念はない」「ボリビアではあらゆる事が起きるが、何も変わらない (En Bolivia pasa todo, pero no pasa nada)」等々、ボリビアについて語る言葉は枚挙に暇がない。こういう環境の中で、日系人の方々は日系人としてのアイデンティティを継承しながら、日系人としての特性を発揮しつつ、誇りを持って活躍していることを記しておきたい。

(つばき ひでひろ 海外日系人協会理事、
前駐ボリビア大使)